様式 C-19

# 科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 5 月 25 日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）

研究期間：2007～2008

課題番号：19830007

研究課題名（和文）シンガポール地理カリキュラムに関する研究－わが国との比較を通して－

研究課題名（英文）A Study on National Geography Curriculum in Singapore; Compared to Japan

研究代表者

吉田　剛（YOSHIDA TSUYOSHI）

宮城教育大学・大学院教育学研究科専門職学位課程・准教授

研究者番号：10431610

研究成果の概要：　本研究は、シンガポールの初等社会科・中等地理シラバスの分析、現地調査、そしてわが国と欧米との比較を行った。その結果、シンガポールの初等社会科・中等地理カリキュラムには、国民統合的・早期教育的・概念的知識重視傾向などの特徴が見られた。ただし、初等社会科と中等地理には顕著な系統性が見られなかった。シンガポールの方が PISA 型「読解力」に有利なカリキュラムであると推察できたが、わが国の平成 20 年版もそれに見合った内容に変化してきている。

交付額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合　計 |
|---|---|---|---|
| 2007年度 | 1,320,000 | 0 | 1,320,000 |
| 2008年度 | 1,350,000 | 405,000 | 1,755,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総　計 | 2,670,000 | 405,000 | 3,075,000 |

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：教育学、カリキュラム、地理教育、読解力、教育政策

1．研究開始当初の背景

(1)文部科学省は、2003 年 PISA 結果を分析し、わが国の学校教育における「読解力」不足を指摘し、学校教育への改善方向を示した。また 2003 年国際教育到達度評価学会実施の TIMSS 結果の分析から、学ぶ意欲や学習習慣に課題が見られ、テレビ・ビデオを見る時間が長くなったことを指摘した。この結果から、わが国ではとくに数学・理科・国語から学力問題がクローズアップされる場合が多いが、社会科教育においても「読解力」やテキストのあり方、学習意欲や学習習慣などの課題を十分に検討する必要がある。そこで本研究では、TIMSS 結果、数学・理科ともに世界第1位の高学力水準を示したシンガポールの学校教育に着目する。

(2)わが国とシンガポールには、アジアに属し、工業化によって国民所得水準が高く、海洋に囲まれ資源の少ないなどの共通点がある。ただしシンガポールでは、小学校段階より国内共通テストによって学力別コースに振り分けられ、個々の子どもたちの能力に応じた早期からの教育が充実している。その社会的背景には、国際競争に打ち勝つための強力な言語政策や都市国家の生き残りをかけた強い社会観が存在している。

(3)社会科や地理教育に関するわが国の先行研究からみると、シンガポールの初等社会科や中等地理シラバスに関するものは少なく、その解明に意義がある。また、初等社会科のあるシンガポールでは、わが国と同様、U.S カリキュラムの影響を受けている。ただし戦前は U.K 支配下にあり、潜在的には U.K からの影響も考えられる。この点から、シンガポールの社会科・地理カリキュラムの解明は、近年、わが国において盛んな欧米地理カリキュラム研究との対比を通して、わが国の小中学校社会科地理カリキュラムの今後のあり方に新たな示唆を与える可能性がある。

2．研究の目的

シンガポールの初等社会科や中等地理カリキュラムにおける系統性を明らかにする。その際に、わが国や欧米との比較・検討も通して、従来、十分に着目されてこなかったわが国の社会科地理カリキュラムにおける PISA 型「読解力」などの学力問題に対する新たな方向性を模索する。

3．研究の方法

(1) 平成 19 年度は、シンガポールの社会背景や教育制度を踏まえ、シンガポールの初等社会科中等地理シラバス（2000 年版、2006 年版）およびテキストブックの分析によるシンガポール地理カリキュラムの全容を明らかにする。

(2) 平成 20 年度は、その地理カリキュラムの構造性を追究するために、わが国の小学校中学校社会科地理カリキュラムの潮流を踏まえ、わが国で言うところの「地理的見方・考え方」「地理的技能」などの観点から比較・考察を行う。そして現地資料調査や現地教育大学スタッフとの意見交換により精緻化していく。さらに U.S や U.K の地理カリキュラムのアウトラインとの比較・検討も加えて、シンガポールの地理カリキュラムの系統性を明らかにする。その成果から、今後のわが国の社会科地理カリキュラムの改善策を検討し、わが国の地理学習における PISA 型「読解力」などの学力問題に関する検討を行う。

4．研究成果

主な成果は次の(1)～(10)にまとめられる。

(1)近年のシンガポール教育においては、未来への生き残りをかけた挑戦が政府や国民に求められ、それは二言語政策の義務化・成績振り分けなどの教育における多民族主義・実力主義・社会団結に基づいている。また、シンガポール教育改革のスローガン、TSLN(Thinking school、

Learning Nation)(1998)→TLLM(Teach Less、Learn More)(2004)といった一連の教育省の意欲的な教育政策に基づいている。

(2)シンガポール初等社会科カリキュラム2000年版から1・2年にも社会科が導入され、2006年版でその系統性が内容構成において整理されてきた。その中で未来のシンガポールの生き残りをかけた国民統合の観点が基盤となり、世界的市民性に関する意義は若干含みながらも、地域社会の民族コミュニティにおける市民性そして国民性を求める方向から全般的に自国の歴史的・多文化的テーマが強調されてきた。この点は、わが国の平成 20 年版中学校学習指導要領社会科歴史的分野の強調に通じるところがあり、華人系の東アジア・東南アジアを中心とした一般的な傾向になっていく恐れがある。であるとすれば、カリキュラムにおいて歴史と同様の配置関係にあった地理の存在意義を新たに見出していく必要性が求められてくる可能性もある。

(3)シンガポール初等社会科カリキュラム2006年版では、中心「概念」がスパイラル的に習得される中で TSLN の意義が組み込まれている。知識目標では、環境拡大カリキュラム原理のもとで各学問的分野のキー概念を軸にして、1～3年までの問いがHow形式、4～6年まではWhy形式の理解となり、授業づくりを見通しやすい内容構成原理が指示された。技能目標は「過程と探求」「伝達」「参加」「批判的・創造的思考」の区別から系統的に指示された。態度価値目標は学習題材に規定されながらも、TSLN を引き継ぐ国民統合的側面が強く反映され、NE（国民教育）やCME（公民道徳教育）と繋がり合っている。

(4)シンガポール初等社会科カリキュラム2006年版は、内容構成原理の基で各目標の組織性・系統性がシンプルで明確であり、わが国と比較してみれば、初等教育から中等教育への見通し、学習過程における問いの在り方、各技能目標の発展性や具体性が参考と成り得る。ただし、授業時数ではわが国より少ない。また、シンガポール初等社会科は、シンガポール国家の教育を特徴付けるような能力選抜一斉テストに加わらず、わが国と同様に、言語・算数教育よりは重要視されていない。

(5)シンガポール中等地理カリキュラムは欧米地理カリキュラムのフレームワークに近い内容（テーマやキー概念）や項目の序列立てから、明確にカリキュラムが構成されている。とくにわが国の内容以上に自然地理的内容が取り入れられ、系統立つ。つまり、シンガポール初等社会科カリキュラムでは CME・NE に関連する国民統合のための側面が強いが、中等地理カリキュラムの方では自然科学や社会科学としての側面が強く、国民統合的側面はかなり弱まる。このような中等地理カリキュラムの様態は、とくに歴史的背景からU.K カリキュラムに近いものとして捉えられる。

(6)シンガポール初等社会科と中等地理カリキュラムの系統性については弱いといえる。一方で聞き取り調査から、初等社会科と中等社会科カリキュラムや中等歴史カリキュラムとの系統性は、中等社会科と中等歴史の授業担当者がほとんど同一なために、強いものとして推察できる。場合によっては、社会科と歴史による国民統合を基軸にした系統性としても捉えられる。

(7)シンガポールの場合、論述形式のテスト問題が重視され、説明力が求められてきたわけであるが、概念的知識に重きを置くシンガポールの方が、仮に PISA 型「読解力」の向上の点からみれば効果的であろう。具体的には、図表やモデル、写真や資料などの理解のために、必ず説明を伴っているからである。また発問が強く意識さ

れ、自国を事例にするシンガポールの初等社会科や中等地理カリキュラムの構成は、個別的な知識理解よりも概念的知識の理解や定着が優先される点が強く打ち出している。したがって、わが国の地理カリキュラムで言うところの「地理的見方・考え方」、とくにその中の地理的基本概念の育成が重視されているとも言い換えられる。

(8)一方で、シンガポールでのいくつかの授業視察や、教師への聞き取り調査から再び検討してみると、概念的知識を考えながら獲得させていくというよりは、ICT を介して概念的知識を教授し確認していくような授業スタイルが一般的であるようにも窺えた。したがって、カリキュラムと実際の授業とには距離があり、教科書用の教師ガイドはあるものの、教師自身が授業を創造し、カリキュラムに応じていくだけの力量を、充分に身に付けていく必要があることも窺えた。この点は、わが国においても同様と言える。

(9) シンガポールは多民族によって構成され、歴史も浅く小島国であるため、国家教育的側面（価値態度）、つまり国民統合的な側面が強く反映されたカリキュラムとなっている。また、初等中等社会科・地理において学習すべき地理的事象そのものがわが国より極端に少なく、わが国で言うところの「地理的技能」の育成といったスキル教育の充実とともに、ICT やテキストブックなどの工夫によって高度な概念的な知識理解が早期から求められるカリキュラムとなっている。いわば、国民統合型・早期教育型・概念的知識育成型・スキル育成型のカリキュラムと言うことになる。

(10)多民族国家であり、多言語教育が著しく発達しているシンガポールでは初等社会科・中等地理カリキュラムやテキストブックにおいて、PISA 型「読解力」の向上の観点からみると、わが国よりは大きな問題とならないことが予想される。つまり、シンガポールにおいては、PISA 型「読解力」を育成しやすい教育環境にある。この点は、わが国の平成 20 年版の「小学校学習指導要領社会」や「中学校学習指導要領社会」などにおいて、「習得→活用→探究」や、「調べる→考える→表現する」などの学習過程が強調されたことによって、わが国の社会科カリキュラムがシンガポールのような言語活動に関わるカリキュラムの特徴を帯びてきたことになる。加えて、二言語政策のシンガポールを見習えば、平成 20 年版における小学校英語の必修化もそれに影響する可能性が考えられる。ただし、平成 20 年版の場合、概念的知識の獲得に関する明確な例示がなされておらず、この点に関わる「読解力」の育成が学校現場や教育行政あるいは研究者の各々において、今後どのように展開され、主張されていくべきかが課題となる。

多民族国家のシンガポールであるが、その中でも中国系の華人の割合が高く、社会的な影響力も強い。そこで今後は、同じ華人系の中国、香港そして台湾における地理カリキュラムへの分析を進めていきたい。それにこれまでのシンガポール、欧米そしてわが国との比較・検討を行い、グローバル・スタンダードとしての地理カリキュラムのあり方やわが国の今後の地理教育における課題と展望についてさらに追究していきたい。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）

①吉田剛、中学校学習指導要領社会における地理的見方・考え方の潮流、宮城教育大学紀要第 43 巻、pp.43-59、2009 年(2 月)、査読無.

〔学会発表〕(計　4 件)

①吉田剛、シンガポールにおける初等社会科と中等地理カリキュラムの関連性、日本社会科教育学会、2008 年 10 月 12 日、滋賀大学.

②吉田剛、社会科地理的分野における地理的見方・考え方と地理的技能の枠組み－「内容」と「方法」の視点から－. 2008 年 7 月 20 日、三重大学.

③吉田剛、シンガポールにおける初等社会科シラバスの変容、日本社会科教育学会、2007 年 10 月 8 日、埼玉大学.

④吉田剛、シンガポールの中等地理シラバスの変容－2000 年版～2006 年版へ－、日本地理教育学会、2007 年 8 月 5 日、関西大学.

6. 研究組織

(1)研究代表者

吉田剛(YOSHIDA TSUYOSHI)
宮城教育大学・大学院教育学研究科専門職学位課程・准教授
研究者番号:10431610